

〈礼拝説教〉 2009年 7月 5日

どうしてこうなるのですか？

マタイによる福音書

15章 29 — 39節

詩篇

85編 9 — 14節

武田真治

一、四千人に食べ物を与える

先程、司式者に今日の聖書の箇所を読んで頂きました。皆様も目で追いながら「あれ、同じような出来事がこの前あったのじゃなかったかなあ？」と気が付かれた方もおられるのではないかと思います。そういう方は素晴らしいです。

それは、このマタイによる福音書の十四章の十三節以下のところで、イエス様が5つのパンと2匹の魚から五千人の人たちに食事を用意してくださった奇跡があったからです。その奇跡と今日の箇所の四千人の人たちに食事を用意された奇跡とがとてもよく似ている出来事であるからなのです。

この二つの奇跡が、十三章と十五章というように近接して報告されていることから、これはもともと一つの出来事が二つに分けられたのだとか、そもそもこんな奇跡はなかったなどと主張される研究者が出てきたりするのです。

ただそれでは、この後十六章の九節からのところで、イエス様がご自分で『覚えていないのか。パン五つを五千人に分けたとき、残りを幾籠に集めたか。また、パン七つを四千人に分けたとき、残りを幾籠に集めたか。』と弟子達に言われておられる言葉をも否定してしまうことになるのではないのでしょうか？私達は聖書の言葉を大事にしていきたいと思います。

その上で改めて問うことは、どうしてこの四千人に食べ物を与えられる奇跡が起こったのだろうか？またそこにはどのような意味が込められているのだろうか？という点です。

二、カナンの女性の信仰により

この点について考える時に、とても重要な役目を果たしているのが、今日の聖書の箇所の直前に起こった出来事であると言えます。

それは、イエス様がティルスとシドンという異邦人（ユダヤ人以外の民族）が多く住んでいる場所に行かれた時のことでした。

その地に住んでいたカナン人（昔からユダヤ人とは対立していた異民族）の女性から『主よ、

憐れんで下さい。娘が悪霊にひどく苦しめられています』と癒しをお願いされた時に、最初は『私はイスラエルの家の失われた羊のところにしか遣わされていない』と異邦人への癒しを拒否されておられたイエス様が、「主よ、ごもつともです。しかし、小犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです」と願うその女性の姿と言葉に感動されて『婦人よ、あなたの信仰は立派（原文では大きい）だ。あなたの願いどおりになるように』と娘の病気を癒してあげられた事件でした。

それはまさに「事件」と呼ぶのにふさわしい出来事でした。なぜなら「まずユダヤ人に」とお考えになっておられたイエス様のご計画を、この女性は変更させてしまったと言い得るからなのです。この女性のへりくだって謙遜に「おこぼれでもいいですから」と言う姿に、イエス様は「ユダヤ人よりも大きな信仰を持っている」と評価されて、それならば恵みを受けるに値すると奇跡を起こされたのでした。それは異邦人への救いと癒しとを開拓して行った出来事、まさに「事件」だったのです。

そして今日の箇所二十九節へと続くのです。

即ち『イエスはそこ（ティルスとシドン）を去って、ガリラヤ湖のほとりに行かれた』と。

三、ガリラヤ湖のほとり？

さて問題です。ここでイエス様は『ガリラヤ湖のほとりに行かれた』とありますが、それはどこなのでしょう？

と言いますのも、『ほとり』ということは、ガリラヤ湖のどこかの沿岸地域ということであり、湖の西側ならばイエス様や弟子達が育たれたガリラヤ地方となるのですが北側や東側も考えられるからです。

同じ出来事を報告してくれています「マルコによる福音書」では、カナンの女性の癒しの後に『イエスはティルスの地方を去り、シドンを経てデカポリス地方を通り抜け、ガリラヤ湖へやって来られた』とあります。この土地関係をパレスチナの地図で見ると、ティルスとシドンは西北の地中海沿岸にある町ですから、そこからガリラヤ湖の東南にあるデカポリス地方に行くには、そのまま南下してガリラヤ湖の西側を通過した後、東に向かいデカポリス地方に向かう道が最も近道です。そうしてそこからガリラヤ湖に向かうと、それはガリラヤ湖の東側に行きつくこととなります。そこは、ユダヤ人たちの土地ではなく、むしろ異邦人がたくさん住んでいるト

ラコンという地域になるのです。従ってここでの『ガリラヤ湖のほとり』は、東側のトラコン地域にイエス様が行かれたと考えられるのです。

そうであるならば、今日の聖書の三〇節以下『大勢の群衆が、足の不自由な人、目の見えない人（中略）、その他多くの病人を連れて来て、イエスの足もとに横たえたので、イエスはこれらの人々をいやされた』と報告されている、この群衆や癒された人々はユダヤ人ばかりではなくてむしろ異邦人が多かったと考えられるのです。イエス様はここでユダヤ人以外の人たちをたくさん癒され、奇跡を起こされたのでした。

そのことは、三一節でこのイエス様の癒しや奇跡を目の当たりにした『群衆は（中略）見て驚き、イスラエルの神を讃美した』とあることから分かります。イスラエル人が自分たちの神様を賛美する場合にわざわざ「イスラエルの神を讃美する」とは言いません。異邦人だからこそこんな不思議な力ある業を行えるイエス様の信じている「イスラエルの神様はすごい」という言葉になるのではないのでしょうか？

ここまでのことを見る時、浮かび上がってくるイエス様の姿は、異邦人の伝道と癒しに積極的に出て行かれるお姿であり、そこにイエス様の強い意志を感じることができるのです。そうではないのでしょうか？

四、どうしてこうなるの？

そして三十二節から「四千人に食べ物を与えられるパンの奇跡」が起こるのです。

即ち『イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた。「群衆がかわいそうだ。もう三日もわたしと一緒にいるのに、食べ物が無い。空腹のまま解散させたくはない。疲れきってしまうかもしれない。』と。

このイエス様のお言葉は、まさにご自分のそばにいる「異邦人たち」に対する深い同情の言葉です。ティルスやシドン地方からずっと付き従って来た人達もいたことでしょう。三日間ほとんどまともな食べ物を口にしていない状況は考えられます。ですからイエス様は弟子達に対して「空腹のまま帰らせたくない」だから何か食べものはないと尋ねられたのでした。

しかしそう言われた弟子達の反応はなぜか冷たい言葉を語ります。

『弟子たちは言った。「この人里離れた所で、これほど大勢の人に十分食べさせるほどのパンが、どこから手に入るのでしょうか。』」です。

でも、どうでしょうか？本来なら既に「五千人へのパンの奇跡」を経験した弟子たちであるならば、ここでもこのイエス様のお申し出に対して「そうです。またパンの奇跡を起こして下さいみんなを喜ばせてあげましょう」と言ってよかったのではないのでしょうか？

しかし彼らはそのような発想は少しも持たないのです。むしろ、彼らの本音は、なぜ自分たちユダヤ人が普段仲の悪い対岸の異邦人のためにパンを用意しなければならないのかという考えだったのではないのでしょうか？そして、こうしてイエス様が異邦人に向けて伝道や癒しを始められたことも納得できないでいたことではなかったのでしょうか？まさに「どうしてこうなるのか？」と。

そのような弟子達の考えを知りながらも、イエス様は以前の「五千人に食べ物を与えられた奇跡」の時と全く同じように『地面に座るように群衆に命じ、七つのパンと魚を取り、感謝の祈りを唱えてこれを裂き、弟子たちにお渡しになった。人々は皆、食べて満腹した』のでした。

「五千人へのパンの奇跡」はユダヤ人への奇跡でした。まさにそれと同じことを、同じようにイエス様が「異邦人にも」神様の恵みを与えてあげたいという思いがここに表れているのです。それが「四千人に食べ物を与えられたパンの奇跡」の意味です。そのためにこうして同じような奇跡が近い場所であるのでした。

まさに、神様の恵みと祝福は、ユダヤ人であろうが異邦人であろうが民族を越えてどのような人にも豊かに注がれるのです。このイエス様の思いが後のキリスト教会を力強く導いていったのでした。世界宗教への歩みの初穂がここにあるのです。

しかも『残ったパンの屑を集めると、七つの籠いっぱいになった』のでした。「七」とは神様が天地創造をなさった全世界を意味する完全数です。まさに全世界への神様の恵みは溢れるのです。

五、一人に向き合われる主

最後に、本当にすごいと思うのは、このような異邦人の癒しと恵みに、それこそ一八〇度転換された理由はたった一人のカナン人の女性の信仰であったということです。

その一人の女性の信仰に感動されたイエス様は、それまでのご自身のお考えにこだわられることなく、新しい異邦人への伝道に自らを解放させていかれたのでした。それは一人に全存在を掛けて向き合われるイエス様のすごさを表しているのです。

私たちはなかなかそうはできない者ですが、少しでもかくありたしと願うものです。

(礼拝説教より抜粋)